
74巻3号

2019年7月1日

YAA 天文会報

(7~9月号)

781号

〒226-0016

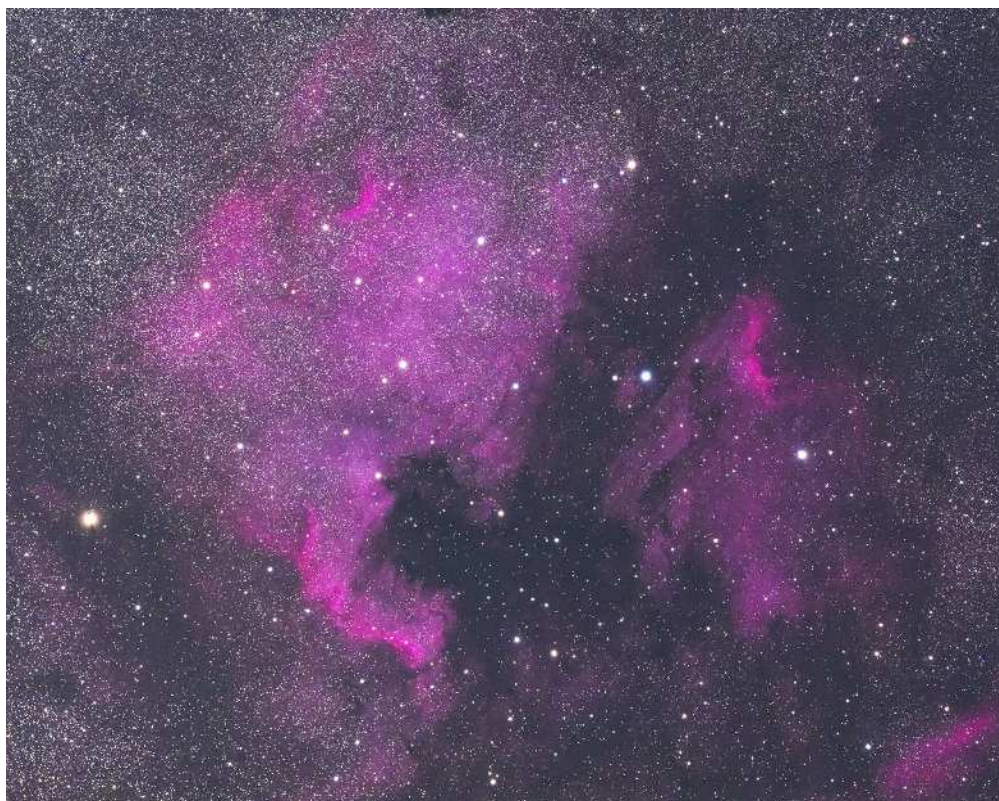
横浜市緑区霧が丘 4-1-7-402

正木 仁 方

Mail: masaki@e08.itscom.net

HP: <http://home.n03.itscom.net/yaa/index.html>

横浜天文研究会



撮影：山形幹夫

観望ガイド

正本

梅雨の最中、6月22日は夏至でした。自宅のほうは雨でしたが、週明けの25日・26日は日差しに恵まれ、遅くまで外は明るくいかにも夏至らしい日となりました。今年の梅雨明けは遅れるとの予報も出ています。また梅雨末期は豪雨による災害が毎年のように起きています。お互いに気を付けましょう！

日が沈むと南東の空には木星が明るく光っています。右下のアンタレスがちょっとかすんで見えるような気がします。少し時間が経つと土星も追いかけるように昇ってきます。木星はへびつかい座の足元、さそり座との境付近。土星は南斗六星（いて座）のすぐ上です。天の川が見えるところでは、ちょうど天の川を挟んで対岸同士で輝いているように見えます。

もう梅雨は明けているとおもいますが7月31日未明、みずがめ座 δ 流星群、やぎ座 α 流星群が極大となります。新月直前ですから観測条件は最良です。みずがめ座 δ 流星群は放射点が午前2時ごろに南中します。30日の日没後薄明が終わるころにはみずがめ座はすでに東天に見えています。そして月が昇るのは翌朝の日の出直前ですから、頑張れば一晩中観測可能です。

また、やぎ座 α 流星群が同時に活動しています。やぎ座はみずがめ座のお隣ですから、どちらの群に所属する流星か区別が難しいかもしれませんが、大まかにいうとやぎ座群のほうが流星のスピードが遅く見え、火球が多いのが特徴です。出現数はどちらも1時間当たり数個と少ないですが、やぎ座群の火球を1個でも見ることができれば感動できると思います。私も、昔に初めて見た赤みがかった色の火球がゆっくり流れる様は、今でも鮮明な記憶として残っています。

8月はやはりペルセウス座流星群ですが、今年は極大時刻が日本時間の13日17時、おまけに満月前の月が沈むのが14日の3時半近くということで、残念ながら実際に見える流星数は少なくなってしまうと思われます。

9月は13日が中秋の名月、実際の満月は翌4日の13時13分です。今回の満月は地球から遠地点近くにあるのでスーパームーンの逆、小さく見えます。

次ページは少し前のものですが、夕焼け空に細い月と地球照がよく見が見えたので手持ちカメラで撮ってみました。シルエットは富士山と丹沢山塊です。

【7月例会】

7月13日（土）18時00分～19時30分

東戸塚地区センター2F 小会議室



月齢1.7の月と地球照
2019年3月8日18時21分
ISO1600,露出1/50sec
PENTAX K-5IIs / PENTAX FA f1.8-77mm Limited
(正木自宅にて撮影)

オートガイダー設定で苦労してしまった

山形幹夫

今年に入って赤道儀Mark-Xのパソコン制御について作業をしており、そのついで？に撮影を行っています。ステラショットを使用していますが、撮影光学系とガイドスコープの焦点距離、ガイドカメラ機種を入力しても、オートガイドの制御画素閾値が自動的に計算・設定がされないようです。これに気づかずガイドが流れました。デフォルト値が適正でないことが原因。モーターと制御ユニットは最新ですが赤道儀は設計仕様が古く、機械的精度は今日的には不足のようです。ウオームとホイールギアの噛み合わせを硬めに調整し最適化を図りました。焦点距離455mmの望遠鏡でオートガイド精度が満足できるレベルまで調整できました。結局、ガイドスコープの焦点距離が130mmで閾値は0.15ピクセルです。これらは遠征用の機材で、夏にはもっと空の状態が良い所へ出かける計画中です。

2017年7月号の表紙写真M8・M20の撮り直しました。2019年5月4日2時59分～、タカハシFSQ-85EDP (f455/5.4)、カメラNikon D810A 30×24mmサイズ保存、感度ISO3200と800各90秒×8枚、フラット×4枚、撮影地:長野県入笠山(標高1810m)。全てJPEG形式ファイルをステライメージ8でコンポジット後レタッチ処理。画像の色乗りは感度設定ISO800位を超えると低下が始まるのではないかと意見があり、撮影時間を同じとしてISO3200と800の2条件で撮影しコンポジットを行いました。2年前の画像より猫の手部分の色が良く出ていると思います。



【表紙の写真】NGC7000北アメリカ星雲・IC5067ペリカン星雲 機材・撮影地等は上記と同じ。2019年5月4日2時18分～31分 ISO4000 90秒×8+フラット4枚。

太 陽 黒 点

観測者：藤森 賢一（諏訪）機材：8cm屈X67 15cm投影

日	2019年3月					2019年4月					2019年5月				
	N		S		全	N		S		全	N		S		全
	g	f	g	f	R	g	F	g	f	R	g	f	g	f	R
1															欠測
2															欠測
3															欠測
4															欠測
5															欠測
6															欠測
7															欠測
8															欠測
9															欠測
10															欠測
11															欠測
12															欠測
13															欠測
14															欠測
15															欠測
16															欠測
17															欠測
18															欠測
19															欠測
20															欠測
21											0	0	0	0	0
22											0	0	0	0	0
23											0	0	0	0	0
24											0	0	0	0	0
25											0	0	0	0	0
26											0	0	0	0	0
27											0	0	0	0	0
28															雨
29															雨曇
30											0	0	0	0	0
31															雨曇
平均											0.0		0.0		0.0

望遠鏡故障により欠測致します。

藤森 賢一

日月星の伝承を訪ねて (60)

横山好廣

信州の星 ⑦

- 1983年8月6日 長野県大町市大字社 松崎 6459、6473 にて女性(年齢不詳)から

両所とも、縁側には七夕人形とカワコシサマが吊り下げられていた。

七夕

- ・ 六日の晩には、(七夕様に) お灯明・果物・マンジュウを供える。マンジュウは、小麦粉を練り固めて蒸したもので、中に餡子や茄子などの野菜を千切りにしたものを詰めてある。
- ・ 着物を掛ける木製の脚付きの衣文掛けのようなものをカワコシサマといって、それに子どもの着物を掛けて飾る。カワコシサマは親類から貰っていたが、今は親兄弟やハネ親から貰うとのこと。
- ・ 昔は、笹竹に短冊を吊るさなかった。今は、短冊だけとって川に流す。笹は竹ぼうきにする。
- ・ 七夕には雨が降らない方が良くいと云われてきた。

- 1986年8月4日 長野県北安曇郡八坂村野平 坂井謙二郎氏(年齢不詳)から

- ・ キタノミョウジョウ----北極星
- ・ ヒシヤクボシ----北斗七星
- ・ ミツボシ----オリオン座三星
- ・ アケノミョウジョウ----金星
- ・ ナガレボシ----流星。「ホシがふる」という。
- ・ ホシノクソ----黒曜石のこと。

七夕

- ・ 七夕人形は紙を折って作り、笹竹の先に吊るす。障子紙で作った網も笹竹の先に吊るす。短冊は七夕用のもので歌などを書き、紙縊りで吊るす。
- ・ 六日朝、里芋の葉や稲の露で墨を摺る。穢れの無い水で墨を作るということに意味があるそうである。
- ・ 六日晚、軒に竹を飾りうどんを供える。昔は、米より小麦が多く作られていたことを反映してようである。
- ・ 七日朝、マンジュウを供える。起きがけに河原で顔を洗うことを「眠り

流し」と云う、飾りとかに工夫をしてある七夕と交換する。交換したものを家に持ってきて軒下に立てマンジュウや西瓜等を供える。マンジュウは中に小豆の餡が入り、小麦粉で包み蒸籠で蒸かしたもの。

この日は、部落ごとに笹竹を立てた筏一基を麦わらで作り、壮年の男5人位がそれに乗り、上の村境から下の村境まで約2kmの川下りをするが、競争ではない。

- ・ 七日は七夕祭りといって休みを取った。朝食後には、墓掃除をする。

- * 「眠り流し」に感動、如何なる形で伝承されてきたのだろうと思った。

月見

十五夜、十三夜、十日夜には斗栴或いは竹箕に鏡餅・葉付き大根二本を入れて、縁側に供える。月見は大根の年取りといって二本供える。大根を育ててくれたことへの感謝であるという。大根は十五夜に早生物、十三夜には中生物、十日夜には晩生物を供える。

- * 月見が稲作の行事という側面が感じられないのが面白い。

月待

- ・ サンヤサマをしていた。(二十三夜待のことであろう)

- ・ 月の出まで、母は針仕事をしながら村の娘たちと毎月、月を待っていた。良縁に恵まれるようにと炒った大豆・米の粉・砂糖を月に供えた。

- ・ 男は、わら細工、わらじ作りなどをしていた。

- ・ 月が出てから解散をする。

- * 男女で行っていた行事のようであるが、宗教色を感じさせない点が興味深い。

●1989年8月4日 長野県北安曇郡八坂村船場 山崎哲夫氏(年齢不詳)から

七夕

- ・ 七日、竹を各戸で2本用意し、色紙に歌や星の名前などを書いて吊るし、七夕人形はないということである。

- ・ 竹は川へ持って行き、1本は筏に挿し、1本は他家のものと交換し、虫除けに畑(大根畑・菜畑)へ立てる。交換できないときは、川の水で根元を洗って持ってくる。

- ・ 供え物には、初なりのモロコシ・ナス・キュウリなどの7種類の野菜類とオヤキ(ナス餡)を縁側に出した。

- ★ 筏の概要---麦わらで作る。七夕の竹を20本位立て、船場から川口までの

12～13 kmを筏下りをする。この行事は子どもだけでしていたというのには驚いた。

＊ 野平と船場は同じ八坂村でありながら、七夕人形の扱いに違いがあったり、筏にも違いがあったりと興味深い。

●1984 年 8 月 5 日 長野県東筑摩郡波田町押出地区にて農家の男性(年齢不詳)から

七夕

- ・七夕様は願い事をかなえてくれると云われている。
- ・七夕(短冊)は笹竹に飾るか、軒下に注連縄のように張った縄に吊るす。
- ・七夕人形は紙で折るか、或いは人形を吊るす。
- ・七夕の笹竹や短冊などの飾り全ては、16日に盆火と一緒に和田川に流す。

★ 盆火の概要---麦からを藁で編み、大きいもので一辺2メートル位の三角錐の形に作り、中心には笹竹を束ねて立て、藁や七夕の短冊や飾りをそこに巻き付けて、火をつけて川に流す。

＊七夕と盆行事の習合が窺われる習俗である。どれくらいの数の盆火が流されるであろうか。送り盆に賑やかな光景を想像した。

月見

十五夜、十三夜、十日夜の三月見をする。

斗栱に葉付き大根二本と二段の鏡餅を供える。鏡餅のうち、一つは月のもので、もう一つは自分達のものということである。

(つづく)

天 象

相原 榮

7月

水星: 夕方の西北西天で高度を下げる 上旬は観望好期 +1.1~+4.0~-+2.3等 かに座
金星: 明け方の東北東天低空 -3.9等 おうし→ふたご座
火星: 夕方の西北西天低空 +1.8等 かに座
木星: 夜半前南中 夜明け前に沈む 観望好期 -2.6~-2.5等 へびつかい座
土星: 宵に昇る 観望好期 +0.1~+0.2等 いて座

3日 04h16m 新月(南米で金環日食)
7日 18h21m 小暑
9日 19h55m 半月(上弦)
14日 未明の南東天で月と木星の接近
16日 宵の南東天で月と土星の接近

17日 06h38m 満月
23日 11h50m 大暑
25日 10h18m 半月(下弦)
28日 みずがめ座δ流星群が極大の頃
30日 やぎ座α流星群が極大の頃

8月

水星: 明け方の東北天 前半は観望好期 +2.3~-1.6等 かに→しし座
金星: 太陽方向 観望困難 -3.9等 かに→しし座
火星: 夕方の西北西天低空 +1.8等 しし座
木星: 宵に南中 夜半過ぎに沈む -2.5~-2.3等 へびつかい座
土星: 夜半前に南中 観望好期 +0.2~+0.3等 いて座

1日 12h12m 新月
1~7日 スターウィーク
8日 02h31m 半月(上弦)
04h13m 立秋
10日 明け方の東天で水星が見やすい(西方最大離角)
12日 宵の南東天で月と土星の大接近

13日 03h ペルセウス座流星群が極大の頃
15日 21h29m 満月
18日 はくちょう座κ流星群が極大の頃
23日 19h02m 処暑
23h56m 半月(下弦)
30日 19h37m 新月

9月

水星: 夕方の西天 高度低く観望困難 -1.6~-0.3等 しし→おとめ座
金星: 夕方の西天低空 -3.9等 しし→おとめ座
火星: 太陽方向~明け方の東天 観望困難 +1.8等 しし→おとめ座
木星: 夕方南中 夜半前に沈む -2.3~-2.1等 へびつかい座
土星: 宵に南中 +0.3~+0.5等 いて座

6日 12h10m 半月(上弦)
宵の南西天で月と木星の接近
8日 07h17m 白露
宵の南天で月と土星の接近
13日 中秋の名月
14日 13h33m 満月

22日 11h41m 半月(下弦)
23日 16h50m 秋分
25日 未明の東天で月とプレセペ星団が接近
29日 03h26m 新月